

《新会員のひと言》

私とポーランド

北浦 由花里



Dzień dobry! 札幌市出身で、ポーランド・ワルシャワにあるショパン音楽大学大学院に在籍しております、北浦由花里と申します。現在、ワルシャワにてピアノの勉強をしています。今年度から協会に入会させていただくこととなりました。

私とポーランドの出会いは、幼いころショパンの音楽に触れたところから始まります。その繊細で美しい音楽からは、彼の喜びや嘆きが感じられます。そんなショパンはどんな言語を話し、どんな生活をしていただろうか。そういった疑問を抱き、彼の祖国であるポーランドに留学することを決意しました。

ポーランドに住み始め、市民の方々の優しさに触れる毎日をご過ごしています。悲しい歴史を経験してきたからでしょうか、常にお互いに助け合って生活し、私のような外国人にもたくさんの暖かい手を

差し伸べてくれます。

右も左も分からなかった留学当初でしたが、今ではポーランドの文化を楽しむことができるようになりました。大学院では、ポーランドの文学や美術などにも目を向けながら、ショパンの他に、彼が生きた前後の時代の作曲家たちの研究もしています。ポーランドには素晴らしい音楽が数多くありますが、それらの根底には“民族としての誇り”を色濃く感じ取ることができます。

将来は、そんな魅力的なポーランド音楽の普及に貢献していきたいと思っています。今後皆様と交流させていただけることをたいへん楽しみにしております。どうぞよろしく願いいたします。

(きたうら・ゆかり、ショパン音楽大学大学院生)

新刊紹介

『ポーランド語《詩篇》のための音楽』
ミコワイ・ゴムウカ(作)、黄木千寿子・小早川朗子・関口時正(編)

ハンナ
2021.1

ミコワイ・ゴムウカの生涯

ミコワイ・ゴムウカは、ポーランド・ルネサンスを代表する作曲家の一人です。1535年頃サンドミエシュに生まれ、45年末にのちのヤギェウォ王朝最後の王=大公ジグムント2世アウグストの宮廷少年歌手となり、その後木管楽器奏者として63年まで宮廷楽団に奉職しました。66年サンドミエシュに戻って金融や司法関係で活躍し、そこで結婚、一人息子ミハウを授かっています。

1580年頃、再び音楽家としてクラクフに戻り、87年まで司教ピョートル・メシュコフスキのお抱え音楽家となりました。その後1590~91年、宰相ヤン・ザモイスキの下に音楽家として滞在していたという記録を最後に消息は途絶えています。

現存する彼の作品は、ここでご紹介する詩篇歌集『ポーランド語《詩篇》のための音楽』(1580)のみですが、たとえ1作であれ、この作品は、ゴムウカをポーランド・ルネサンスの卓越した作曲家と呼ぶに足る、価値と独自性を持っています。

「黄金の時代」と詩篇歌

ヤギェウォ王朝時代はポーランドにとって繁栄を謳歌した「黄金の時代」であり、当時の首都クラクフでは、王室カペレや、ヴァヴェル城チャペルのロラ

ンティスト・カペレが、ツイプアーノ・デ・ローレやラッススなど当時西洋最先端の作曲家たちや、ポーランドの作曲家たちの作品を演奏していました。

一方市民階級の音楽活動も盛んになり、16世紀に広がった宗教改革によって自国語による平易な宗教歌が書かれ、それを普及するための印刷所が各地に作られました。中でも詩篇歌はカルヴァン派によって特に重視され、いくつもの詩篇歌集が出版される一方、カトリック側もその独占権を奪おうと詩篇歌出版に凌ぎを削っていました。

コハノフスキ「ダヴィデの詩篇」を音楽に

その中でとりわけ異彩を放っているのが、このゴムウカの詩篇歌です。現代ポーランド語の発展に多大な貢献をした、ポーランド・ルネサンスの代表的詩人ヤン・コハノフスキの、ポーランド語による「ダヴィデの詩篇」150篇に作曲されたこの作品は、テキストの特徴を音楽で表現し、言葉と音楽との一体化を計ろうとした工夫が随所に見られます。

また、おそらく宮廷楽団時代に培われたであろう、当時の西欧における新旧さまざま



な技法(伝統的なネーデルランドの対位法からマドリガーレまで)に加えて民族的なポーランド舞踊のリズムが駆使され、簡素で無駄のない150余の小品に束ねられています。

宗教的寛容の証しとして

まさに珠玉と言える、美しい作品の数々は「素朴な民衆のために」書かれ、カトリック司教に献呈され

ながらも、賛辞は改革派活動家が寄せるという、当時としては稀有な宗教的寛容の証しでもあります。

この度ハンナ社より、ポーランド声楽曲選集の第6巻として、このうちの37曲が出版されました。多くの方々が、この美しい作品を知り、味わってくださることを願ってやみません。(黄木千寿子、音楽学、愛知県立芸術大学ほか非常勤講師)

『迷子の魂』 オルガ・トカルチュク(文)、ヨアンナ・コンセホ(絵)、小椋彩(訳)

岩波書店
2020.11

2019年、ポーランドで五人目のノーベル賞を受賞(2018年には『逃亡派』2007で国際ブッカー賞を受賞)したオルガ・トカルチュクが、その前年の2017年に初めて「絵本」にテキストを提供した、この『迷子の魂』は、ヨアンナ・コンセホの詩的“絵画”(絵本の領域をはるかに超えた、美術絵画のカテゴリーに組み入れるもの。銅版画(エッチング)と疑う陰画と、華やかな油彩の陽画との鮮やかな対比!)を得て、私のかつて知らない、他に類を探し得ない巧緻、精緻な絵本に仕上がっている。(海外の絵本では、独自繊細なモノクローム線画と強弱の韻を踏んだ文章—その全てが柴田元幸訳—のエドワード・ゴリーへの傾注私は未だやまずにいるが、そのテイストを全く異にする。)

白水社の『逃亡派』読後で、トカルチュクがワルシャワ大学で心理学を専攻、卒業後セラピストを経ていることを既に知っていて、『迷子の魂』からエッセンスとして浮かびだしたのは「ユング」だった。ユング自伝の中の熾烈な言葉「人間にとって決定的な問いとは、自分が限らないものとつながっているかどうかということである」を鮮明に想起した。

あるところに忙しいビジネスマンがいた。(それはとりもなおさず直進する文明社会を黙々と生き継いでいる私達だ。一人のヤンは千人の私達だ。)ある夜、出張先のホテルで夜中に目覚めて異常に気付く。息が出来ない、自分の中にもはや誰もいない、名前すら憶い出せない。翌くる日、賢い女性医師を訪ね、次のように告げられる。「忙しく走り回る人で世界はあふれ返っている。彼等の魂は背後に置き去りにされて迷子になっている。」医師はヤンに告げる。「魂が動くスピードは、身体よりもずっと遅い。あなたは静かに落ち着ける場所を見つけて、そこでじっくり自分の魂を待ちなさい。」

ヤンは医師の治療法に従順に従ってその街の田園の小さなコテージにとどまり、迷子にした魂の

やってくるのを、どこへも行かず何もしないで、幾日も幾週も幾年も待つ。幼い頃の光り輝いていた時代(陽の色のコートを着た少女がいつも彼に寄り添っている)の画がコテージの男の絵と等分に、絶えず私達に保たれる。思い出はセピア色の写真にまで添えられる。

待ち続ける物語は、誰しもが反射的にベケットの『ゴドーを待ちながら』1952 を思う。ゴドーは一体誰だったのか。神だと言い、救済者だと言い、そしてその不条理劇に私達は心酔した。あれは人間が存在しているのはどういうことか、と考えさせる実存主義哲学の出発点だった。

『迷子の魂』では、トカルチュクは悲惨な 寓話には終らせない。魂は、ある午後、美しい少女となってヤンの窓辺に、疲れて汚れて傷だらけで“やっとな!”と言って帰ってくるのだ。表紙の椅子には、解離性障害を予兆させるヤンの上着(ジャケット)が絶望としてかかり(椅子の足元には忙しい移動の暗示として重要な意味をもつトランクが置かれ…)、陽転の日々の安堵の椅子(同一)には少女(魂)のオレンジのコートが 希望 としてかけられている。

コンセホの絵には到る処、美しい仕掛け(ギミック)が横溢している。詩と思想が濃く潜んでいる(『迷子の魂』は2018年に栄誉あるボローニャ・ラガッツィ賞を受賞)。ヤンが魂を失っている時のモノクロページは無機質な冬の絵で、やがて植物や動物に囲まれる(自然回帰…)色彩豊かな世界へ。そしてさらに濃密な光と彩りで生の歓喜へ。

最終章でヤンはトランクと時計を庭に埋める。ヤンとその初々しい魂は相携えて、これからアンダンテ・モデラートといった足どりでゆっくりと原郷への道を歩み出すのだろう。

去年春からこうしてコロナ禍にあって、世界で移動が制限され、此処に留まることを余儀なくされた今、私達はもう一度「魂」と出逢わなければならない。

人類必至の道程。私達はもう魂を迷子にはさせない。(長屋 のり子、詩人、本会会員)

